

アイヌ口承文芸テキスト集 6

白沢ナベ口述 兄に殺されかけ、犬に救われた

採録・訳・註 中川裕

解説

今回紹介するアイヌ口承文芸のテキストは、1988年4月6日、千歳市蘭越の故白沢ナベ氏の御自宅において、筆者が氏から録音したウエペケレ「散文説話」であり（整理番号：N8804061.UP）、2004年度千葉大学普遍教育科目「アイヌ語4」（中級後期）で教材として使ったものである。

あらすじ

私はウライウシナイというところで、母と妻と3人で暮らしていた。近くには兄が別棟を建てて兄嫁と暮らしていた。私は狩の名人であり、獲物をたくさんとってきては兄を招待してご馳走したりしていたが、兄はあまり狩が得意ではなかった。妻も母も働き者で、私は何不自由なく暮らしていた。

そんなある日のこと、兄がやってきて、狩場に熊の巣穴を見つけたのだが自分ひとりではどうにもならない。お前なら何とかなると思うから一緒に来てくれと言う。たったひとりの兄の言うことであるし、私は何も不審に思わずについていった。

里側の狩場を抜け山奥の狩場に行くと、兄が断崖絶壁の縁に近づいて、「あそこの下のほうだから、見ろ」と指差して言う。「どこだって？」と言いながら崖の縁に近づくと、後ろから突き飛ばされて、崖を転がり落ちた。あちこちに叩きつけられ、雪と一緒に転がり落ちて気を失った。しばらくして意識を取り戻すと、崖の底で下半身が雪に埋まってしまって、身動きがとれない。雪はすっかり固く積もって、手で掻き削ることもできない。このままでは凍え死んでしまうに違いないと思って、近くのカムイをまたぎ越して、遠くのカムイに祈りの言葉を伝え、助けを求めた。

そうして幾日か過ぎると、どこからか美しい小犬がやってきて、鳴きながら私の周りの雪を掻き取ってくれようとする。何日もの間そうやっているうちに、ようやく足を抜き出すことができた。するとその小犬は私の足をペロペロなめてくれ、おかげで凍えていた足に感覚が戻ってきた。

すると今度は小犬はどこやらへ向かって歩き出した。私が歩けなくなりそうになると、立ち止まって振り返り、私を待ってはまた歩き出す。そんなことをくり返しているうちに、大きな家の前に

来た。小犬が鳴きながら戸口を引っ掻くと、中からひとりの老婦人が出てきてまた引っ込み、姿が見えなくなっていた家の小犬が誰かをつれて来たと、家の主人に告げた。主人が私を通すように言ったので、婦人にうながされて私は家に入り、主人である老人と挨拶を交わした。老人が「どこから来たのか？」と尋ねるので、ことの次第を述べると、老人は立ち上がってケウエホームスという、無事を見舞う儀礼をしてくれ、元のように歩けるようになるまで家に逗留しろとってくれた。

その言葉に甘えて何年かその家で暮らしているうちに、やっと自由に歩けるようになったので、私は老人たちに礼を述べ、兄に復讐するために家に戻ることにした。何日も野宿をしながらついに自分の家にたどりついた。見ると、家のまわりは草ぼうぼうで、細い煙が家から立ちのぼっているばかりであった。家に入ると、母も妻もやせ細って骨と皮ばかりになっていた。

「今、生きて戻ってきたよ」といって起こしても、ふたりとも頭から夜具の着物をかぶったまま、「魔物がうるさいことよ」と言って、起きようとしな。何度も起こし続けているうちに、ようやく母が着物の袖口からこちらをのぞき、「息子よ！」と言って抱きついてきた。妻も「あなた！」と言って抱きついてきた。気がつくとき家の中にあつた<sup>シントロ</sup>行器や<sup>バッチ</sup>鉢などの宝物がすっかり無くなっている。母にわけを聞くと、こう答えた。

「お前の兄はひとりで戻ってきて、お前が熊の巣穴に引きずり込まれてしまったと言った。もう悪熊に食べられてしまっただろうから、俺の妾になれとお前の嫁に言う。私も嫁も腹を立ててなじると、お前の兄は家にある宝物を全部持って行ってしまった。ただ、刀と槍の刀身を1本ずつ、私が寢床の下に入れて寝ていたもので、それだけが残っているのだ」

それを聞いた私は、母と妻に食事を作ってやって介抱した。そのうちにふたりとも元通りの力、元通りの姿を取り戻したので、母の渡してくれた槍を杖にし、太刀を佩いて兄の家に行った。戸口の筵を真ん中からぱさりと切り落とし、中に飛び込んだ。兄は上座のほうを向いて自分のもみあげを搔き、兄嫁は下座のほうを向いて糸縫りをしていた。私は兄と兄嫁の肩口に槍を突き刺し、首を切り落とした。

その後に、母と妻がやってきたので、兄の家の中にある品物をよりわけさせた。母と妻は我が家の宝物を見分けて外に運び出した。残ったものを見ると、もともとの兄の財産はほんの粗末なものではなかった。私は大いに腹を立てていたもので、兄と兄嫁の遺体を家と共に焼き払った。それから財産を家に運んでみると、自分が大層な長者であることがわかった。

それからは、母も妻も畑仕事に精を出し、私も山でたくさん獲物を獲ってきて、余った肉を家の周りに干しておいた。子供たちもたくさん生まれ、女の子には妻が女の仕事を、男の子には私が男

の仕事教えて暮らしているうち、子供たちも大きくなり、旅人たちも私の家の周りに住み着いて、私を村長として敬ってくれた。そのようにして何不自由ない暮らしを送ったので、「兄弟といえど、その心をよく見定めて暮らすのだぞ」ということを言いおいて、天寿をまっとうした。

## 解説

どの民族の物語にも、「ねたみ」というものが事件を起こす大きな要因となる話がたくさんある。アイヌの口承文芸でもその点に変わりはない。むしろそうした人間の本質と言うものをリアルに描き出している点で、本編は近代小説にも比すべき内容を持っている。

この話の敵役である兄は、決してなまけものというわけではない。ただ、猟運に恵まれないために、交易の品である熊や鹿の毛皮を集めることができず、sintoko「行器」やpatci「鉢」などの宝物を和人から手に入れることができない。それで、そうしたものを山積みになっている弟に対して、ねたみ心を募らせていくわけである。逆に言えば、そんな風にねたみ心を増大させ、実の弟に殺意を抱くまでになるような心情的性質の持ち主であるが故に、カムイたちからそっぽを向かれ、猟運に見離されていたと考えるべきかもしれない。弟のほうはそんな兄の気持ちに気づくことなく、獲物がとれたと言っては兄を家に招いてご馳走する。兄は弟の家の宝壇に積み重ねられた宝の山を見ながら手柄話を聞かされ、弟のおすそ分けをふるまわれるたびに、さらにプライドを傷つけられ、憎悪の念をつのらせていったのであろう。

さて、弟を殺したと信じた兄は、弟の嫁を自分のものにしようとするが、抵抗に合うとあっさりあきらめ、代わりに行器や鉢などを根こそぎ奪っていく。後に復讐をとげた弟も、まずこれを取り返してから、残りすべてを焼き払ってしまうわけだが、これらの漆器類を命がけで奪い合うことにどのような意味があったのだろうか？

これらは家の上座にあたる側の壁際に積み重ねられ、iyoykir「宝壇」と呼ばれるものを形成するものだが、uepeker「散文説話」のテーマのひとつとして大きな位置を占める topattumi も、これを求めて村を襲ってくる。topattumi については、CES5号掲載の「トパットゥミから逃れたウライウシナイの少年」に詳述したが、ある村の住民が、村ぐるみで遠く離れた他の村を襲い、これらの宝物を奪って、そこの住民を皆殺しにしていく行為であり、単に食い詰めた人々が生き延びるために行う野武士のような行動ではない。場合によっては北海道を半分横断するほどの距離を移動し、険しい山を越えて襲ってくるのである。つまり topattumi とはこの宝物をめぐる争いに他なら

ない<sup>1</sup>。

狩や漁、あるいは女性による山菜採取や耕作で十分な食料を得、子宝にめぐまれて、孫が作ってくれるものを食べられるまで長生きする。nep a=e rusuy ka nep a=kor rusuy ka somo ki no okay=an 「何を食べたいとも、何を欲しいとも思わないで暮らしている」。それがアイヌ人の伝統的な幸福な人生の理想図であるはずだが、その中であってこの宝物というのはいかなる位置を占めるのだろうか？

それを解く鍵は、inaw「木幣」にあるのではないかと私は考えている。人間は様々なカムイから恩恵を受ける代わりに、カムイたちが自分の手では作り出せないもの、すなわち、tonoto「酒」、sito「団子」そしてinawなどをカムイに捧げる。その交換によってお互いが利益を得るとというのが、aynu「人間」とkamuy「カムイ」の基本的な関係である。その際、tonotoやsitoはカムイたちの好物ということで理解が可能だが、inawというのはカムイにとってどういう意味があるのだろうか？ inawを捧げるというのは、カムイに何事かを頼み、感謝を表す際の必須の事項である。しかし、例えばカムイを主人公とする「神謡」のような物語の中で、彼らにとってinawを得ることにどんな効用があるのかということが、具体的に語られることはほとんどない。ただ、inawを含めたそれらの供物を人間から送られ、感謝の祈りを捧げられることで、eyaykamuynerere「それによって自らをカムイにする」すると語るだけである。

しかし、「だけ」と書いたが、常にそう語られるということは、そのeyaykamuynerereするということこそが重要なのである。この動詞は「自らの神格を高める」と訳されることが多いが、アイヌ語の語源通りに「自らをカムイにする」という訳で考えてみると、inawを手に入れることではじめてカムイとして認められるような存在になるということであり、つまりカムイ社会の中で自分が優れた存在であることを示す証となるのである。

送り儀礼を中心にした人間とカムイとの関係が、アイヌ人と異民族との交易を通じた関係を引き写したものである可能性を私はつとに指摘してきたが<sup>2</sup>、そうした観点から見た場合、inawのこう

---

<sup>1</sup> topattumi については、中川裕 (1998) 「口承文芸にみるトパットゥミ」帯広百年記念館編『平成9年度 帯広百年記念館アイヌ文化シンポジウム「アイヌ民族の文化と歴史を再考する」』: 51-59 参照。

<sup>2</sup> たとえば、中川裕 (2002) 「アイヌ文学の精神像—散文説話を事例に—」東北芸術工科大学東北文化研究センター『東北学』Vol. 7 : 106

した機能は、アイヌ人における sintoko などのそれを反映したものとみなすことができるだろう。sintoko は、現在現物が残っているもので見るかぎり、和人の作った「<sup>ほかい</sup>行器」と呼ばれる漆塗りの曲げ物であるが、儀礼の際に酒を造ったり入れておいたりするものを除いて、ほとんどのものは宝壇に積んであるだけで実用には使用されない。これは patci 「鉢」や tuki 「杯」、otcike 「折敷」など、儀礼の際にそれを使用する場面が必ずある他の漆器類と異なる点である。これに相当する、つまり、具体的に何の役に立つというのではなく、それを手に入れて持っているということ自体が重要な器物というのが、カムイにおいてはまさに inaw なのではなかろうか？

すなわち、他世界の者—カムイにとっては人間、アイヌ人にとっては他の民族—から手に入れる以外には入手不可能なものを所有することこそが、自分の優秀性の証となるということであり、本来自給自足的な生活で事足りるはずの彼らが、あえて余剰価値的なものを生産し、はるばると交易にでかけては、布や糸やタバコや米などの「実用的な」品とともに、日常生活においては直接の役に立たないように見える sintoko を持ち帰ってきたことの意味がそこにあるのだと考えられる。

さらに話を飛躍させれば、アイヌの伝統的儀礼用具は日本語からの借用語とみて、ほぼ間違いのないものが多い。patci 「鉢」、tuki 「杯」、takaysara 「天目台」、otcike 「折敷」、takusa 「手草」、nusa 「幣柵」などをはじめ、ikupasuy 「捧酒篋」も pasuy の部分は日本語の「箸」と同源であるとみなすことができる<sup>3</sup>。しかし、inaw と sintoko については日本語からの借用という説明は困難であり<sup>4</sup>、少なくとも名称に関してはこれらの儀礼用具とは別起源と考えなければならない。前述のように、sintoko は他の儀礼用具に比して儀礼の際に果たす役割がいまひとつ分明でないものであり、むしろ象徴的なものとしての意味が大きい。このように考えていくと、アイヌ人の信仰・儀礼体系の中で、この inaw と sintoko は、和人の漆器類が大量にアイヌ社会（というか、時期的には擦文文化時代と考えたほうがよい）の中に流入する以前、言い換えれば現在我々が知るようなアイヌ人

---

<sup>3</sup> 中川裕 (2005) 「アイヌ語にくわわった日本語」『国文学解釈と鑑賞』2005 年 1 号 至文堂: 96-104 参照。

<sup>4</sup> 池上二良 (1973) 「アイヌ語系統論」『民族学研究』38-2 では、「日本語から入ったとみられているアイヌ語の sintoko (ほかい) は、カラフトのオロッコ語の sittoo (たる) となり、またギリヤーク語 (高橋盛孝) にも入っている」と述べているが、日本語において sintoko に当る語形が具体的に確認されたという記述はない。むしろ、それらの言語からアイヌ語に入った可能性のほうを考えてみる必要がある。それについては、丹菊逸治 (2003) 「ニヴフ語の sindux 『樽』」についての短い

の儀礼体系が確立する以前から、カムイと人間のそれぞれに対して同じ象徴的機能を果たすものとして存在していたということが可能性として考えられる。そして、和人との交流が深まる過程で sintoko がすべて行器に置き換えられるとともに、同時に入ってきた鉢や箱や杯などが同じ役割を果たすものとして iyoykir の構成物として積み上げられていくようになったというシナリオを考えてみるのである。

### テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、= (イコール) は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。\_ (アンダーライン) を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、an w\_a → an ma。h\_i や y\_ak のような例では、h や y が脱落することを示す。... とあるのは、単なるポーズ、言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思われる場合に付す。その際、\*re ... などのように\*を添えたものは、単語が言いさしになって、不完全な形で終わっていることを示す。なお、こうした言いさし・言いよどみは、それを示しておかないと、どこまでを言い直しているのか判断がつかなくなるような場合のみ示してある。原文テキストとその訳は、段落ごとに対応するように左右に並べて提示した。註は各ページごとに脚註の形で示した。

脚註において N8806181.FN のように記してあるものは、私の採録した資料の整理番号である。N(白沢ナベ) 88 (1988 年) 06 (6 月) 18 (18 日に録音した) 1 (本目のテープに収録されている) .FN (フィールドノート) であることを示す。参照文献の略称は次の通り。

『千歳方言辞典』: 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館

『沙流方言辞典』: 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館

『萱野辞典』: 萱野茂 (1996) 『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂

『久保寺辞典稿』: 久保寺逸彦編 (1992) 『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道教育委員会

---

考察」『itahcara』2号：千葉大学文学部日本文化学科ユーラシア言語文化論講座、参照。

## 本文

a=yupihi an wa a=unuhu ka an.	私には兄がいて、母がいた。
a=macihi ka an.	妻もいた。
a=yupihi macihi ka an w_a oka=an korka	兄の妻もいて、暮らしていたが
uatceta <sup>5</sup> oka=an wa <wa>...	(兄夫妻とは) 別の家で暮らしていて、
oka=an korka <ka>,	暮らしていたが、
asinuma ka poro=an <sup>6</sup> w_a,	私も大きくなって
orowano ekimne=an hike	そして山に狩に行くと
tup sumawe rep sumawe a=eawnarura <ra>.	獲物を二頭も三頭も獲って来た。
omuken=an w_a hosipi=an	てぶらで戻ってくる
sekor anakne isam no <no>,	ということはなく、
ison=an w_a hosipi=an kor an=an	いつも狩の成果を上げて帰ってきた。
ruwe ne awa <wa>... an=an wa,	のであるが…であって
a=yupihi ka	兄も
iraye=an w_a san=an kor	私が獲物を獲って山を下りてくると
a=tak wa a=ipere ka ki <sup>7</sup> ,	招いてご馳走を食べさせ
a=sikasuyre <sup>8</sup> wa inawke=an w_a	手伝ってもらって、イナウを削って

<sup>5</sup> uatceta : <u-「互いに」 atce「よそ」-ta「で」。ceは ciseの縮約形かもしれない。ceを ciseの意味で使うという記述は、バチエラーの辞書等、色々な記録に散見される。なお、後で明示されることだが、この段階ですでに、母親がどちらの夫婦と一緒に住んでいるかは推測できる。兄夫妻が先に家を出て別宅を建て、弟が母とともに残って嫁をとってともに暮らすというのが古い風習である。

<sup>6</sup> poro=an : すでに妻を娶っている年齢でありながら「私も大きくなって」というのは変である。ここは、子供の頃から話を始めた場合の展開とごっちゃになったのであろう。

<sup>7</sup> ここでは、兄の狩の腕がどうであったかは触れていないが、自分が獲物を獲ったときに兄を招くということだけが描かれていることから、兄の腕が主人公より劣るものであったことが推測できる。後半の、これまでのいきさつを語るシーンで、そのことがはっきり語られる。

<sup>8</sup> sikasuyre : si-「自分」 kasuy「～を手伝う」-re「～させる」。弟が兄に手伝わせてイナウを削るという逆転の構図になっており、この辺からすでに怪しい雰囲気はただよいはじめている。

kamuy ka pirvano a=nomi. ne kusu,  
 po anakne a=tekorkasi <si>  
 kamuy ka \*euisis ... euse(?)<sup>9</sup>  
 yuk ka poronno a=rayke.  
 cep ka pirka usi patek  
 poronno a=rayke wa <wa>,  
 cise or\_ ta ka kam racitke cep racitke.  
 piye usike osumtapes kor oka=an kor,  
  
 a=unuhu ka a=macihi ka arikiki p ne kusu,  
 toyta kor tu pu epunpa re pu epunpa.  
 nep a=e rusuy nep a=kor\_ rusuy ka  
 somo ki no oka=an ruwe ne a p,  
 sineanto a=yupihi ene \*hawe ...  
 ek hine ene hawean h\_i ene an h\_i<sup>10</sup> <ni>.  
 "iwor<sup>11</sup> or\_ ta suy par asin<sup>12</sup> w\_a  
 an ruwe ne korka <ka>,  
 asinuma anakne sinen a=ne wa inukuri=an<sup>13</sup> kusu,

カムイにも丁寧に祈りをした。ので、  
 よりいっそう、私の手の上に？  
 クマも？  
 シカもたくさん獲れた。  
 魚もよいのばかり  
 たくさん捕れて  
 家の中にも肉を下げ、魚を下げ  
 脂ののったところは油をしたたらせて、(その  
 ように裕福に) 暮らしていた。  
 母も妻も働き者であったので  
 畑を耕して二つの倉、三つの倉を立てた。  
 何を食いたいとも何を欲しいとも  
 思わないで暮らしていたのだが  
 ある日のこと、兄がこう…  
 やってきこう言った。  
 「狩場にクマの巣穴が見えていて  
 いるのだが  
 私ひとりでは手に負えないので

<sup>9</sup> \*euisis ... euse : 不明。次の yuk ka poronno a=rayke の対句であるとしたら、a=rayke でよさそうなものだが、そうは聞こえない。

<sup>10</sup> ene hawean h\_i ene an h\_i : 白沢さんのひとつの特徴的な言い回しである。沙流方言の話者であれば、ene hawean h\_i だけですますのが普通だと思われる。

<sup>11</sup> iwor : この例のように、iwor 「狩場」には通常「誰の」という限定をつけない。これは pet 「川」に対しては a=kor pet 「私たちの川」という言い方がよくなされることと対照的である。

<sup>12</sup> suy par asin : suy 「穴」 par 「口」 asin 「出る」。白沢さんの言葉では、この asin という動詞は通常、この「雪がとけてクマの巣穴が見える」という用法でしか出てこない。それ以外の例としては、イケマに中毒した時の呪文として ikema tampu he tampu he mawe he asin. というのがあるが、これは毒の息 (mawe) よ体の中から出る (asin) という意味にとれる。

<sup>13</sup> inukuri : 「やる気がおきない」。etoranne が「面倒くさい」といった感じなのに対し、nukuri は「や



a=akihi a=tura yakne	弟と一緒になら
iwor or_ ta an kamuy *sum ... kamuy suy よ	狩場にいるクマの…クマの穴よ
kamuy suy a=kosirepa easkay nankor	クマの穴にたどりつくことができるだろう
sekor yaynu=an w_a kusu <su>,	と思うので、
a=akihi eun a=siren rusuy ruwe ne.”	弟（お前）をそこへ連れて行きたいのだ」
sekor hawean kor ek wa kusu,	と言いながらやってきたので、
a=tura hine,	一緒に行って
ene a=i=ramu kuni <sup>14</sup> ka,	私のことをどんな風に思っているのか
a=ramu ka somo ki no a=tura hine,	考えもせずに一緒に行って
os arpa=an akusu,	後をついていったところ
kimun sanke ... sanke iwor a=oposo hine	里側の狩場を通り抜け、
kimun iwor *a=ohemespu ... *a ...	山奥の狩場に…
hemespa=an w_a nupuri ka ta paye=an.	登って、山の上に行った。
ratki situ <sup>15</sup> situ kari hemespa=an w_a	尾根の稜線に沿って登って
paye=an akusu,	行くと
nupuri ka ta paye=an kor,	山の上に戻ってくると
”toon ta ra ta ne ruwe ne. inkar_.	「あその下の方だ、見ろ。
too suy par asin w_a an korka <ka>,	ずっと向こうに、クマの巣穴が出ているが、
inukuri.	俺にはむりだ。
sinen a=ne wa a=nukuri wa kusu,	ひとりでは無理だから、
a=akihi ne yakun	弟なら
toan suy or epa kuni a=ramu wa kusu,	あの穴まで行けると思ったから
a=siren w_a ek=an ruwe ne na.	連れてきたんだ。
inkar inkar”	見ろ、見ろ」

る力がないので、やる気力がわからない」という意味で使われるようである。

<sup>14</sup> ene a=i=ramu kuni : ene 「そのように」 a= 「人が」 i= 「私を」 ramu 「～と思う」 kuni 「はず」

<sup>15</sup> ratki situ : ratki は「ぶら下がる、垂れ下がる」と訳されることが多いが、実際にぶら下がっていても、滝や尾根のように上からひと続きに下がってくるよう見えるばあいにも、用いられる。

sekor hawean kor <o>	と、言いながら
iwor paruru esan'esan hine <ne>,	狩場の縁に近づいて
i=inkare i=inkare kus ye <sup>16</sup> p ne kusu,	私に見ろ見ろと言うので
"hunak ta ne ya?"	「どこだって？」
sekor itak=an kor iwor parur a=osan'osan <sup>17</sup> .	と、言いながら狩場の縁に近づいた。
ranke wen kut rik un wen kut	下方の切り立った崖と上方の切り立った崖が
koekari wen kut <sup>18</sup> , wen kut un ne	合わさった絶壁で
a=kus usi ka isam no siran,	通えうところもない様子
siran usi ne wa eun heturituri wa,	様子であるところで、そこへ首を伸ばして
"toon ta toon ta."	「あそこだ、あそこだ」
sekor hawean kor yaka yaka kor <o>	と言って、指を指しながら
hetutturi p ne kusu,	首を伸ばしているのだ
asinuma ka ene a=i=ramu kuni	私も、そんなふうに使われているとは
a=ramu ka somo ki p ne kusu,	思いもしなかったから
a=yupihi ne kusu	自分の兄なので
neun a=ramu ka somo ki no,	何も考えもしないで
"hunak ta ne hawe ne ya?"	「どこだって？」
sekor itak=an kor,	と言いながら
kut parur a=osan'osan akusu	崖の縁まで出て行くと
a=i=oputuye hine,	私は突き飛ばされて
orowano ranke wen kut rik un wen kut <sup>19</sup>	下方の断崖、上方の断崖に

<sup>16</sup> i=inkare kus ye : "inkar!" sekor hawean の間接話法的表現。

<sup>17</sup> a=osan'osan : 3行上に esan'esan というのが出てくるが、意味としてはほとんど違いがないようである。

<sup>18</sup> ranke wen kut rik un wen kut koekari wen kut : 「煙突みたいにがくと立っているのぼることもできないのがこう重なっていて、その上さ上がればまた一カ所上のほうさ見える」(N9309281.FN) ということで、切り立った崖が層状に積み重なったような状況を描写する表現らしい。

<sup>19</sup> ranke wen kut rik un wen kut : 転がり落ちているのであるから、理屈でいえば上方の崖の方が先であるが、もちろんこれは常套句なので、実際の順番と一致する必要はない。

a=i=ekikkik<sup>20</sup> kor, karkarse=an wa ran=an,  
 oyakoyak ki oro a=i=ekik kor karkarse=an.  
 upas ... こんど<sup>21</sup>  
 upas rutke wa upas kokarkarse.  
 upas tum a=oma wa karkarse=an w\_a ran=an.  
 kut asam a=osma ruwe ne hine <ne>,  
 neun iki=an y\_a ka a=eramuskari wa <wa>,  
 tu su at pakno re su at pakno<sup>22</sup>  
 yaymososo a=ki kusu ne a ne a hike ka,  
 yaymososo ka a=niwkes<sup>23</sup> ayne,  
 mos=an w\_a inkar=an akusu,  
 a=noski<sup>24</sup> wano a=kemaha anakne  
 upas tum oma wa,

叩きつけられながら転がり落ちた。  
 あちこちに叩きつけられながら転がった。  
 雪、こんどは  
 雪がずり落ちて、雪とともに転がった。  
 雪の中にはまって転がり落ちた。  
 崖の底に突っ込んで  
 どうなったものやわからなくなり、  
 ふたつの鍋、みっつの鍋が掛かるほどの間  
 自分で目をさまそうとしてみたが  
 目をさますことができないでいるうち  
 目がさめて、見てみると  
 私の（体の）中ほどから、足が  
 雪の中にはまって

<sup>20</sup> a=i=ekikkik : 文字通りには「人が私を（断崖）でぼかぼか殴った」なのであるが、実際には重力の力で断崖に叩きつけられていることを表現している。不定人称 (a=) を用いたこのような表現は、非常にアイヌ語らしいもので、学習者でこのような構文を使いこなすことができれば、アイヌ語の作文力はかなりあると言ってよいだろう。

<sup>21</sup> こんど : ここでは日本語として扱っているのでひらがなで表記してあるが、ウエペケレなどの中では、白沢氏に限らず頻繁に出てくる言葉で、アイヌ語として扱うべきかもしれない。表記の際に躊躇するもののひとつである。

<sup>22</sup> tu su at pakno re su at pakno : よく用いられる常套句だが、白沢氏は次のように説明している。「そのときは時計っていうものがないから、鍋なら煮えれば揚げるから、その時間見計らったこといつているの。ご飯鍋揚げたか、それからおつゆ鍋揚げたか、1回か2回かっていうとこだ。そんなに長い時間なら死んでしまうべね。ご飯鍋なら、一時間もかからんでしよう。おつゆ鍋なら、30分もってというような。見計らいの話だ」(N8806181.FN)。ということで、比較的短い時間を表す表現のようである。

<sup>23</sup> a=niwkes : niwkes は、しようという意思があっても、力が足りなくてし切れない場合に用いる。

<sup>24</sup> a=noski : noski は本来位置名詞なので、i=noski という形が予想されるどころだが、ここでは普通名詞のように主格の人称接辞が用いられている。

upaskorupus=an w\_a mos=an ruwe ne korka,  
 upas anakne rutke kuwa<sup>25</sup> ukaosma kor,  
 tek ani ka a=ke ka eaykap no  
 ukorupus pe ne kusu,  
 a=kerkeri ka eaykap  
 niste upas tum a=oma hine <ne>,  
 tane anakne upas tum a=oma ruwe ne yakun,  
 rupus ekot kuni p a=ne ruwe ne  
 kuni a=ramu kor an=an akusu ... an=an.  
 tutko rerko an=an akusu,  
 "tane siknu kuni p a=ne ruwe ka somo ne."  
 sekor yaynu=an kor an=an.  
 hanke kamuy \*a=itakma ... a=itakkamare  
 tuyma kamuy a=itakepusu<sup>26</sup> <su>,  
 "tapne kane ne wa  
 a=yupihi i=tura wa ek orowa  
 i=kucikare<sup>27</sup> ruwe ne na.

雪と一緒に凍った状態で、目が覚めたのだが  
 雪はずり落ちて積み重なって  
 手で掻きとることもできないほど  
 凍って固まってしまっているの  
 削り取ることもできないような  
 固い雪の中にはまって  
 もはや雪の中にはまっているのであれば  
 凍え死んでしまうであろう  
 と、思っていると…思っていた。  
 二、三日、そのまま過ぎ  
 「もはや生きのびようもない」  
 と思いながらいた。  
 近くのカムイをまたぎ越して  
 遠くのカムイに言葉を伝え  
 「これこれこういうわけで  
 兄が私を連れてきて  
 私を崖から突き落としましたのです。

<sup>25</sup> kuwa : このように聞こえるのだが、解釈不能。

<sup>26</sup> hanke kamuy a=itakkamare tuyma kamuy a=itakepusu : itak 「言葉」 kama 「またぎ越す」 -re 「～させる」、itak 「言葉」 e- 「～で」 pusu 「～を掘り起こす」。祈りの言葉を、近くのカムイをまたぎ越して、遠くのカムイに伝え、言葉で掘り起こすようにして注意を向けさせるということである。なぜそのようにするかについて、白沢氏はこう述べている。「困ったときよくそういうことというの。近い神様、お酒あげたりイナウあげたりして、するとちょっとぼんやりするもんだとあって、ね。そういうような話ぶりだ。近い神様、いつも癖だとあって、かむわれないうつという話であったよ。だから遠い神様に頼めばすぐ助けてもらえるっていうので、遠い神様頼むっていう話であった」  
 (N8806181.FN)

<sup>27</sup> i=kucikare : kut 「崖」 ika 「～を越える」 -re 「～させる」。『千歳方言辞典』では、ika を自動詞としてしか記述していないが、ここでは明らかに他動詞として使われている。

i=siknure wa i=korporare yan.  
 kamuy ne manu p<sup>28</sup>.  
 a=nomi kamuy anakne  
 poronno an pe ne a kusu<sup>29</sup>,  
 i=siknure wa i=korporare yan.”  
 sekor itak=an kor,  
 tu onkami toy a=ukakuspare  
 re onkami toy a=ukakuspare kor, <o>  
 tutko rerko an=an akusu,  
 hunak un hemanta humas humas kane wa kusu,  
 inkar=an akusu  
 irammakaka an pon seta <ta> ek hine,  
 orowano cis cis kane hawean kor,  
 i=okari upas ke a ke a  
 ke a ke a ke a ke a,  
 irampiskire=an w\_a inu=an<sup>30</sup> akusu,  
 tane anakne <ne> asikne to ka  
 iwan to ka siran korka,  
 hosipi ka somo ki no

助けてください。  
 神様。  
 私がお祈りしているカムイは  
 たくさんいるのだから  
 私を助けてください」  
 と言いながら  
 二つの礼拝を重ね  
 三つの礼拝を重ねて  
 二、三日が過ぎると  
 どこからか何か音が聞こえてくるので  
 見ると  
 きれいな子犬がやってきて  
 鳴きながら  
 私の周りの雪を掻きとり掻きとり  
 掻きとり掻きとりして、  
 心の中で数えてみると  
 もう五日も  
 六日もたったと思われるのだが  
 家に戻りもしないで

<sup>28</sup> kamuy ne manu p : kamuy 「カムイ」 ne 「～である」 manu 「とかいう」 p 「もの」。manu は、実際には見たことがないのだが、話には聞いているようなものを指す助動詞。kamuy ne manu p というのはよく使われる言い方だが、一種の婉曲語法であると思われる。

<sup>29</sup> a=nomi kamuy anakne poronno an pe ne a kusu : ウエペケレでこのような表現が出てきた場合、普段祈りを捧げているその大勢のカムイが助けに来てくれることは、まず無い。

<sup>30</sup> wa inu=an : 「試みる」という意味で「～してみる」という時、それが視覚的に捉えられる行為であるなら、日本語と同じく inkar 「見る」という自動詞を使って、wa inkar と表現される。しかし、視覚以外の感覚で捉えられる行為の場合には、通常「聞く」と訳される inu という自動詞を使って、wa inu と表現される。ここでは、心の中で行われた行為であるので wa inu のほうが使われているのである。

i=piskanike ouri a ouri a hine <ne>,	私の周りを掘って掘って
a=kemaha ka sanke. a=kemaha ...	私の足を掘り出した。
a=kemaha unno upas ke hine	足のところまで雪を掻いて
a=kemaha a=etaye easkay. <i>	私は足を引き抜けるようになった。
a=kemaha ka sanke akusu,	私の足を掘り出すと
orowaun nea pon_ seta hetari hine	その子犬は顔を上げて
a=nanuhu nukar siri ne yakun,	私の顔を見ている様子なので
"tane e=kemaha e=etaye easkay na.	「もう、あなたは足を抜くことができますよ。
etaye wa inkar <sup>31</sup> ."	抜いてごらん下さい」
sekor itak siri ne kuni a=ramu kusu,	と言っているように思ったので
こんど a=kemaha neun poka iki=an w_a	足を、何とかして
a=kemaha a=moymoye <ye>,	足を動かした。
a=etaye kusu a=moymoye a a=moymoye a	引っこ抜くために動かし続けて
kor an=an ayne, a=kemaha a=etaye hine <ne>,	いるうちに、足が抜けた。
orowa こんど	すると今度は
a=kemaha kemkem a kemkem a	(小犬は) 私の足をなめなめ
kemkem a <ma> akusu,	し続けてくれると
a=kemaha ka kami inu wa ek <sup>32</sup> ,	足の肉も感覚が戻ってきた。
kami inu wa ek ruwe ne hine <ne>	肉に感覚が戻ってきて
apkaseaskay=an,	私は歩くことができるようになった。
hi orowa こんど ratcitarā	するとこんどは、ゆっくりと
hunak un ka arpa siri ne ya.	(小犬は) どこに行くのであろうか。

<sup>31</sup> wa inkar : 前ページ註 30 で述べたように、ここでの「足を引き抜く」という行為は視覚的に捉えることができるために、wa inkar のほうが用いられている。

<sup>32</sup> inu wa ek : 註 30 で触れたように、inu という動詞は聴覚に限定されているわけではなく、視覚以外のあらゆる感覚について、それを知覚することを表す。ここでの inu の用法はそれをよく表している。～wa ek 「～してくる」という表現は、位置的な移動を指す場合が多いのだが、この場合のように、位置の移動を伴わない変化を指す例もある。

arpa wa kusu ...	行くので
arpa wa arpa hontom ta as wa	行って、行く途中で立ち止まって
apkas ka a=eaykap anki anki	私が何度も歩けなくなりそうに
iki=an pe ne kusu,	しているの
as wa hosari wa i=tere wa an w_a	立ち止まっては振り返って私を待っていて
sama ta ek=an kor,	近くまで私がやってくると
orowa suy arpa ranke kor,	また歩き始めるということをくり返ししながら
keseanpa だか <sup>33</sup> os arpa=an ayne <ne>,	私は後ろをついていった。すると、
poro cise kotan pak <sup>34</sup> cise	大きな家、村ほどもある家が
an ruwe ne hine <ne>,	あって
soyke <sup>35</sup> ta arpa wa kusu,	(小犬が) その (家の) 前に行ったので
asinuma ka soyke ta arpa=an akusu,	私も (家の) 前まで行くと
orowa ne pon_ seta	するとその小犬は
niwniwse kor apa kerkeri <ri>, apa kerkeri.	クンクン鳴きながら戸口をがりがり引っ掻いた。
cis cis kane hawean kor apa kerkeri akusu,	鳴きながら戸口を引っ掻くと、
onnayke wa sine rupne mat soyne hine	中からひとりの老婦人が出てきて
i=nukar hine orowa ahun wa	私を見ると中に引っ込んで
ene hawean h_i ene an h_i <ni>.	こう言った。
"neyun nispa ne nankor y_a.	「どこのお方でしょうか、

<sup>33</sup> だか：この「だか」というのも、註21の「こんど」と同じく、白沢氏に限らずよく差し挟まれる日本語であり、たいていは、直前に言った言葉が言ったとたんに不適切だったことに気づいた時、発される言葉である。ここでは *kesanpa* 「追いかける」と言ってしまったので、「だか」と言って打ち消し、*os arpa* 「後をついていく」に修正したのである。

<sup>34</sup> *kotan pak*：家の大きい様を表す表現だが、*mosir pak* 「島ほど」という人のほうが多く、白沢氏も通常はその表現を用いる。*kotan pak* という例を私が確認しているのは今のところ白沢氏だけだが、氏はこの話以外にもこの表現を使っている。

<sup>35</sup> *soyke*：普通「外(側)」と訳される。日本語で「外」というと内部以外の空間全体を指してしまうが、*soy(ke)*は、基準になるもの(この場合は家)からみて内側か外側かということを表すのであり、基準物に近いところを指す場合が多い。そこでここでは「前」と訳してみた。

siketokna wa a=eramuskari nispa,  
 soy ta, a=kor pon\_ seta  
 hunak un arpa wa ine hompok to isam w\_a,  
 tura wa ek wa,  
 orowa ahunke rusuy noyne  
 cis kor apa koterke humi ne wa."  
 sekor hawean hawe as akusu <su>  
 cise onnay un<sup>36</sup> poro kur onne kur  
 itak hawas hawe ene an h\_i.  
 "tumi sawot pe ka oka,  
 kem sawot pe ka okay pe ne na.  
 iteki iomommomo no ka<sup>37</sup>,  
 ahup rusuy kusu cise soy ta arki utar<sup>38</sup>  
 ne hawe ne kusu,  
 arki ... ek kur ne hawe ne na. ahunke."  
 sekor kane hawas akusu  
 hetopo horoka soyne hine <ne>,  
 "ahup w\_a sini yan"  
 sekor kane hawean kor heetaye wa kusu,  
 os reye kane sinu kane<sup>39</sup> ahun=an wa

見たことのないお方が  
 表に、うちの小犬が  
 どこへ行ったのか何日も姿が見えなかったのが  
 連れてきて  
 (その人を) 家に入れたいらしくて  
 鳴きながら戸に飛びついている音でした」  
 という声がすると  
 家の中から老人が  
 このように言うのが聞こえてきた。  
 「戦いを逃れてくる者もいる。  
 飢饉を逃れてくる者もいるのだ。  
 くだくだしいことを言わずに  
 入りたくて家の表に来た人たち  
 だということなので  
 来た人だということだから、入れなさい」  
 と言うと  
 (老婦人は) また戻って出てきて  
 「入って休みなさい」  
 と言いながら顔を引っ込めたので  
 その後を這いながらずりながら入って行って

<sup>36</sup> onnay un : 逐語訳すれば「中へ」だが、アイヌ語では発信源から音がやってくると考えるのではなく、その方向に向かって「聞く」という動作が行われると考えているらしい。そこで wa「～から」ではなく、un「～へ」が用いられることになる。

<sup>37</sup> iomommomo no ka : この ka が意味不明だが、別の機会にも iomommomo somo ki no ka のように言っているので、必要なものだと考えられる。

<sup>38</sup> arki utar : もちろん、来たのはひとりなので、2行下で単数の ek に修正している。

<sup>39</sup> reye kane sinu kane : 客が家の中で移動する時の常套句だが、ここでは家に入るときの表現として用いられている。実際に家の戸を開けて入るときにも、腰を低くかがめて入るのが礼儀なので、そういう気持ちを表したものだろう。



inkar=an akusu,  
 cise onnay ne yakka irammakaka <ka> oka  
 utar ne rok'oka anan<sup>40</sup> hine,  
 ahun=an wa onne kur an hine,  
 arsoke ta arpa=an hine a=an akusu ...  
 a=an hine onne kur a=erankarap akusu,  
 rayokuskan<sup>41</sup> i=koonkami hine orowa,  
 "ney wa omanan<sup>42</sup> kur e=ne ruwe ne ya?"  
 sekor hawean w\_a kusu <su>,  
 "Urayusnay<sup>43</sup> ta a=yupihi turano  
 usoy<sup>44</sup> un an w\_a oka utar ne wa  
 oka=an pe ne a p,  
 ekimne=an kor\_  
 tup sumawe a=kor\_ rep sumawe a=kor.  
 nep a=e rusuy nep a=kor\_ rusuy ka somo ki.

見ると、  
 家の中もきれいにしている  
 人たちであり  
 中に入ると老人がいて  
 その向かい側に行って座ると…  
 座って老人に挨拶をすると、  
 丁寧に私に礼拝を返してくれて  
 「どこからおいでになったのですか？」  
 と言うので、  
 「ウライウシナイで兄とともに  
 軒を並べて暮らしていた者で  
 あるのですが、  
 山へ行くと  
 二頭の獲物を獲り、三頭の獲物を獲り、  
 何を食べたいとも、何を欲しいとも思わず

<sup>40</sup> rok'oka anan : anan は沙流方言の aan にあたる助動詞で「後からそういうことであったということ  
 がわかる」ということを表すものであり、rok'oka はその複数形であるはずなのだが、白沢氏はこの  
 ように、複数形と単数形を重ねて使うことをよくする。

<sup>41</sup> rayokuskan : 「丁寧に心をこめて」。白沢氏の例の多くは onkami についての形容であるが、客を  
 家の中に招き入れるために女性が戸を開けるときの動作として、rayokuskan hotku 「丁寧にかがむ」  
 という表現も出てくる (N9206021.UP)。

<sup>42</sup> ney wa omanan : 訳では ney wa ek と区別がつかないが、omanan は「歩き回る」という意味であ  
 るので、「いろいろあちこち歩き回って、ここにたどりついた」というニュアンスが感じられる。

<sup>43</sup> Urayusnay : 胆振地方の散文説話によく登場する地名。CES5 号「トパットウミから逃れたウライ  
 ウシナイの少年」註 2 参照。

<sup>44</sup> usoy : u- 「互い」 soy 「の外」。註 35 で触れたように、この表現も、ただ同じ家に住んでいないと  
 いうことを表しているわけではなく、お互いに家の soy 「外側」に相手の家があるという関係にあ  
 ることを表している。ということで「軒を並べて」と訳してみた。実際には現代の日本家屋のよう  
 に、接近して本当に「軒を並べて」建てられているわけではなかろうが。

a=macihi ka a=unuhu ka turano an=an.  
 a=yupihi patek sinna matkor wa  
 sinna cise kor wa,  
 uatce un an w\_a oka=an pe ne a p,  
 ekimne=an kor yuk cikoykip kamuy cikoykip  
 rupne p patek a=tomot wa,  
 a=eawnarura kor an=an pe ne wa,  
 nep a=e rusuy nep a=kor\_ rusuy ka somo ki.  
 a=macihi a=unuhu toyta kor,  
 tu pu epunpa re pu epunpa p ne kusu,  
 toyta aep ne yakka  
 poronno a=kor wa <wa> oka=an pe ne awa,  
 a=yupihi eytasa ...  
 eytasa iraye ka somo ki wa,  
 irapokkari ipe<sup>45</sup> ki pa p ne wa  
 oka=an pe ne a p,  
 korka ene an kewtum kor kuni  
 a=ramu ka somo ki no oka=an ruwe ne a p,  
 sineantota sinean kunneywa ta  
 ek wa i=siren hawe ene an h\_i <ni>.  
 'kamuy nupuri nupuri hontom ta  
 cise par asin w\_a an korka,  
 sinen a=ne wa a=kosirepa ka eaykap

妻も母も一緒に暮らしていて  
 兄だけが別に妻をもらって  
 別に家を建てて  
 違う家で暮らしていたのですが、  
 山へ行くとシカやクマの  
 大きいのばかりに出会って  
 獲ってきて暮らしていて  
 何を食べたいとも何を欲しいとも思わず  
 妻も母も畑仕事をすると  
 二つの倉、三つの倉を建てるので  
 畑の作物も  
 たくさん収穫してくらしていたのですが  
 兄はあまり…  
 あまり狩もできずに  
 粗末な食事をして  
 暮らしていましたが、  
 けれど、まさかあんな了見を持っているとは  
 思いもしないで暮らしていました。  
 ある日、ある朝、  
 やってきて私を誘って言うには、  
 『カムイの山の中腹に  
 クマの巣穴が見えているんだが、  
 ひとりでは行き着けない

<sup>45</sup> irapokkari ipe : irapokkari は『沙流方言辞典』には「何の役にも立たない」、『萱野辞典』には「うすのろだ：知能が劣っていて、動作反応が鈍いこと」と記されているが、要するに他人より劣っていることを表すと考えられる。白沢氏は「irapokkari っていうのは、わしみたいなのが irapokkari (笑)。irapokkari ってゆったら、かわいそうなようなもの話でしょ。なんもない。人くらい動けない稼げないからなんもないこというんだもの (笑)」(N9104061.FN) と説明している。

ruwe ne kusu,	ので、
a=aktonoke ne yakun	弟殿なら
oro osirepa easkay ruwe ne kusu,	そこまで行けるだろうから
paye=an w_a <ma> cisekoas=an <sup>46</sup> kusu ne na.'	一緒に行って、クマ狩をしよう』
sekor kane hawean kor,	と言いながら
i=siren kusu ek ruwe ne wa kusu	私を誘いに来たので
ene an kewtum ...	まさかそのような...
ene an wen kewtum kor kuni	そのような悪い心を持っているとは
a=ramu ka somo ki.	思いませんでした。
patek a=kor pe sine a=yupi ne <sup>47</sup> wa	たったひとりの兄で
usoy ta oka=an ruwe ne kusu,	軒を並べて暮らしているのですから
ene an kewtum kor kuni	そんな心根を持っているとは
a=ramu ka somo ki p ne kusu	思いもしなかったので
a=tura hine <ne>,	同行して
toop kim ta paye=an.	山奥へ行きました。
kamuy nupuri nupuri turasi <sup>48</sup>	カムイの山を

<sup>46</sup> cisekoas=an : cise「家」ko-「～に向かって」as「立つ」と分解できるが、白沢氏の説明によると、この言葉は次のような意味だということである。「cisekoas っていうのは、こんなぼっこ切って、クマあんまりそらって飛び出せないように立てるもんだと。それが cisekoas っていう言葉になるらしいの。こう立てたら、やっとな手離さないば駄目なもんだ。その中からこんどこうやって叩いた時に、urayni 【(築) 杭】押さえていれば振り落されてしまっ、あぶないことできるもんだから、ぱっと立ててぱっと離してしまう。よけるものだっていう話聞きました」(N9309282.FN)。この説明からすると cise-ko-asi「家に向かって立てる」という形になりそうな気がするが、発音は cisekoas であり、自動詞であることから asi「立てる」ではなく as「立つ」であることは明らかである。

<sup>47</sup> patek a=kor pe sine a=yupi ne : patek「それだけを」a=kor「私が持つ」pe「ものが」sine「一人の」a=yupi「私の兄」ne「である」。「たった一人の兄」という表現をアイヌ語作文すると、sinen patek an a=yupi などとやりがちだが、こういう表現のほうが普通。sine はなくともよい。

<sup>48</sup> kamuy nupuri nupuri turasi : kamuy nupuri turasi といっても同じことだが、こういう言い方をよくする。

hemespa=an w\_a paye=an akusu,  
sonno poka ranke wen kut rikun wen kut  
koekari wen kut, kut ...  
kut parur osan'osan hine ene hawean h\_i.  
'toon ta ne wa toon ta  
cise par asin ruwe ne wa ne wa."  
sekor hawean wa kusu,  
'hunak ta ne hawe ne ya?' sekor itak=an.  
ene a=i=kar kuni a=ramu ka somo ki no  
kut parur a=osan'osan akusu...  
kut parur a=osan'osan.  
hehewpa=an akusu, i=oputuye hine,  
orowano ranke wen kut rikun wen kut  
eokari wen kut,  
kut or wa a=i=oputuye p ne kusu,  
episkanne a=i=ekikik ...  
sitar a=i=ekikkik kor karkarse <se>.  
hacir=an ayne nupuri hontom w\_ano <no>  
upas ... upas turano rutke=an w\_a,  
noski pakno ...  
upas turano rutke=an ruwe ne awa <wa>,  
tu su at pakno re su at pakno <no>,  
ray he ne ya mokor he ne ya  
a=ekonramsitne kor an=an ayne <ne>,  
mos=an w\_a inkar=an akusu,  
noski pakno ... rutke upas turano  
rutke=an pe ne kusu <su>,  
tumu ta as=an w\_a <ma>  
mos=an ruwe ne hikeka,

登っていくと

本当に、下方の断崖、上方の断崖が

合わさった断崖、がけ…

(兄は)崖の縁に身を乗り出してこう言いました。

『あそこだ、あそこだ。

クマの巣穴が見えているぞ』

と言うので

『どこだって?』と、私は言いました。

まさかそんなことをされるとは思いもしないで

崖の縁に身を乗り出すと…

崖の縁に身を乗り出しました。

のぞき込むと、兄が私を押して

下方の断崖、上方の断崖が

合わさった断崖

断崖から突き出されたので

まわりに叩きつけられて

岩に叩きつけられながら転がり落ちました。

落ちていったあげく、山の中腹から

雪が…雪と一緒に滑り落ちて

半分まで…

雪と一緒に滑り落ちると

二つの鍋を掛ける間か、三つの鍋を掛ける間か

死んでいるのか、眠っているのか

もだえ苦しみにがらいるうちに

目が覚めて見てみると

(体) 半分まで…滑り落ちる雪と一緒に

(自分も) 滑り落ちたので

その中に立っていて

目が覚めたのですが

tasa ray=an ranke <sup>49</sup>	夢か現か
tasa ray=an ranke kor ki ayne,	半分死んだような気にいるうちに
yaymososo yaysikarun a=ki wa	自分でめざめて意識を取り戻し
yaykouepeker=an w_a inkar=an wa,	よく考えて見ると
a=yupihi i=oputuye a hi	兄に突き落とされたのだったということ
a=esikarun ruwe ne hine,	思い出して
orowa rupus=an w_a	私は凍って
rutke upas rutke kor oar konru ne ...	滑り落ちる氷が途中ですっかり氷になって
oar konru ne nepnekusu,	すっかり氷になってしまったので
niste wa a=tekehe anakne	固くなって、手は
use an <sup>50</sup> pe ne kusu,	抜けていたので
a=kerkeri hikeka upas a=cari ruwe ka	掻き削ろうとしても雪を掻きわけることも
oar isam ruwe ne yakun,	まったくできないということは
tane anakne rupkorupus=an <sup>51</sup>	今や氷の塊となって
etokus ruwe ne kuni a=ramu kor,	しまう運命なのだと思いながら
tutko rerko	二、三日
tuyma kamuy a=itakepusu	遠くのカムイに言葉を伝え

<sup>49</sup> tasa ray=an ranke : tasa 「交替して」 ray=an 「死ぬ」 ranke (繰り返しを表す)。「死んだり生きたりを何度も繰り返しながら」という意。

<sup>50</sup> use an : use anu 「～を脱ぐ」の自動詞形ということになる。こうした例を見ると、an 「ある」と anu 「～を置く」が有対関係(語根を共有する自動詞・他動詞の関係)にあることがよくわかる。

<sup>51</sup> rupkorupus=an : rup 「氷」 ko- 「～とともに」 rupus 「凍る」。rup は ru 「溶ける」 p 「もの」という意味で「氷」を指す。rupus 「凍る」もまた rup 「氷」が us 「～につく」という語構成である。しかるに、『方言辞典』によると、名寄、宗谷、樺太方言ではこの rup が「氷」を表す自立語として用いられるが、千歳方言でもその他北海道の多くの方言でも「氷」を表す自立語は konru であって、rup という形は語の一部としてしか用いられない。こうした状況からは、rup が古く、konru が新しいという判断がなされる。そうすると、「こおり」という語形との似寄りから、konru は日本語からの借用語ということも考え得るのだが、より寒い地方に居住するアイヌが「氷」などという語を、南に住む民族の言語から借用することがあろうかと考えると、一概にそうだと断定することもできない。

hanke kamuy a=itakkamare <re>.  
 'a=nomi kamuy i=ka opiwki wa  
 i=korporare yan.'  
 sekor itak=an kor  
 onkami=an kor an=an ruwe ne korka,  
 i=ka opiwki kamuy sinep ka  
 isam w\_a an=an ruwe ne awa, <wa>  
 pirka pon seta ek hine,  
 orowano i=piskanike cis kor  
 kerkeri a kerkeri a upas cari ayne,  
 a=kemaha sanke pakno upas catcari  
 ruwe ne akusu,  
 hetari wa a=nanuhu okkew ...  
 okkew ehewehewe<sup>52</sup> kor  
 a=nanuhu nukar\_ ruwe ne yakun,  
 tane e=kemaha moymoye wa inkar sekor,  
 pon\_ seta a=nanuhu nukar\_ ruwe ne  
 kuni a=ramu kusu,  
 a=kemaha a=moymoye wa inkar=an akusu,  
 moymoyke hine orowa  
 a=kemaha a=etaye ruwe ne hine,  
 orowa nisapno apkas ka a=eaykap pe ne kusu,  
 a=kemaha kemkem a kemkem a kor an ayne,  
 orowa hunak un sikiru wa kusu ...  
 sikiru wa arpa a p orowa<sup>53</sup> hosari wa

近くのカムイを跳び越えて  
 『私のお祈りするカムイよ、私を助けて  
 ください』  
 と、言いながら  
 礼拝していたのですが  
 私を助けに来てくれるカムイはひとりも  
 いないままでおりましたところ  
 美しい子犬がやってきて  
 私の周りを鳴きながら  
 掻き削り掻き削り、雪を掻きわけて  
 私の足が出るまで雪を掻き散らして  
 くれると  
 頭を上げて、私の顔を…  
 首をかしげかしげ  
 私の顔を見るので  
 さあ、お前の足を動かしてみろと  
 子犬が、私の顔を見ているのだ  
 と思ったので  
 私は足を動かしてみました。すると、  
 (足が) 動いて  
 足を引き抜いたのですが  
 すぐに歩くこともできないので  
 (小犬が) 私の足をなめてくれたあげく  
 どこかへ向かったので…  
 向かって歩き出すと、振り向いて

<sup>52</sup> okkew ehewehewe : okkew 「襟首」 e- 「～の頭」 hewe 「～を傾ける」。白沢氏の説明では、「なんか考えたみたいに、横にかしげること」。

<sup>53</sup> sikiru wa arpa a p orowa : アイヌ語には「～し始める」「～し出す」に相当する表現はない。oasi、

'hokure ek.'	『早く来い』
sekor itak siri ne <sup>54</sup> noyne yaynu=an.	と言っているように思えました。
hosari wa i=sikerayke wa an.	振り返って私を見つめていました。
niwniwse kor i=sikerayke wa an.	クンクン言いながら見つめていました。
'hokure ek.'	『早く来い』
sekor hawean hawe ne <sup>55</sup> kuni a=ramu kusu,	と言っているように思ったので、
orowano neun poka iki=an w_a <ma>,	やっとのことで
os ek=an ayne,	後をついていくと
tan poro cise	この大きな家
cise soyke ta arki=an ruwe ne wa. <sup>56</sup>	家の表にたどりついたのです」
sekor itak=an akusu <su>,	と言うと、
nea onne kur hopuni hine i=kewehomsu <sup>57</sup> .	その老人は立ち上がって、私にケウエホムスを

easi などがそれを表すという記述もあるが、的確な実例を見たことはない。この文の逐語訳は「振り向いて行ったが、そこで」だが、文脈から「歩き出す」という始動相の形で訳した。

<sup>54</sup> itak siri ne : 次の註 55 参照。

<sup>55</sup> hawean hawe ne : 註 54 もこれも、日本語に訳すと「言っているように」になってしまうのだが、siri ne の方は視覚的な情報から判断したことを表す表現で、hosari 「振り返った」様子が「早く来い」と言っているように見えたのであり、hawe ne の方は言葉による情報から判断したことを表す表現で、niwniwse 「クンクン言う」鳴き声が、「早く来い」と言っているように聞こえたのである。

<sup>56</sup> ここまでが主人公の老人に対する説明としてのせりふだが、それまでの話をほとんど丸ごと繰り返していることがわかる。これは白沢氏の特別な語り方ではない。このように話の途中で延々とそこまでの経過をもう一度繰り返すやり方は、色々な人の色々な話にみられる。文字で読むと非常に冗長な、余剰的なものに思われるかもしれないが、口承文芸ではこのようなやり方でストーリーを確実に聞き手に理解させる仕組みになっているのであり、耳で聞いている分には何ら冗長さを感じさせるものではない。

<sup>57</sup> i=kewehomsu : kewehomsu は「危なかったことの見舞いを言う」『沙流方言辞典』、「ねぎらう、同情する、危なかったねーと声をかける」『萱野辞典』などとされるが、本来は九死に一生を得た人に対して、それ以上の危惧が及ばぬように魔払いをする意だったと思われる。『久保寺辞典稿』にある「火事、溺死や、熊に殺されたことがあつた時、村人隣村の人々が集つて行ふ儀式」という説明に、この解釈とつながるものがある。

i=piskanike turimeciw<sup>58</sup>  
 i=kewehomsu hine orowa ene hawean h\_i.  
 "e=apkas easkay pakno <no> e=pikan ...  
 pikanno e=apkas easkay pakno  
 i=or\_ ta e=an kusu ne na."  
 sekor kane hawean.  
 pirka itak i=koanukar ki p ne kusu,  
 orowano oro ta<sup>59</sup> a=kemaha ukorupus,  
 a=kemaha arka p ne kusu,  
 nea pon\_ seta ek wa <wa>  
 kemkem a kemkem a kor  
 riten pekor yaynu=an kor,  
 oro ta ine hompok pa an=an hine,  
 orowa tane anakne  
 neun pakno moy moyke=an yakka  
 a=kemaha a=eapkas easkay wa kusu,  
 "hosipi=an w\_a  
 a=kor\_ yupi a=koyayattasa  
 somo ki yak anakne wen ruwe ne."  
 sekor yaynu=an kusu,

してくれた。  
 私の周りをトゥリメチウして  
 ケウエホムスをした後に、こう言った。  
 「お前が歩けるようになるまで…  
 身軽に歩けるようになるまで  
 私のところにいなさい」  
 と言った。  
 ありがたい言葉をいただいたので、  
 それからその家で…足が凍りついてしまって  
 足が痛むものだから、  
 その小犬がやってきて  
 なめなめしてくれると  
 気持ちよく感じながら  
 その家で、何年か暮らして  
 そして今や  
 どこまで動いても  
 自分の足で歩けるようになったので  
 「家に戻って  
 兄に復讐を  
 せずにはいられるものか」  
 と思ったので

<sup>58</sup> turimeciw : emus 「太刀」を持って、フォッ、フォッと声を上げ、その emus の刃先を少しそらすようにして、相手の体に向かって突き出しながら (tamtespare)、相手の周りをまわること。この行為は kewehomsu の具体的な動作について言っているもので、「よく助かった、えらいもんだ」というようなことを唱えて、この動作を行うのが kewehomsu という儀礼だということらしい。tu 「ふたつの」 rim 「足踏み」 e- 「～で以って」 ciw 「～を刺す」か？

<sup>59</sup> oro ta : この言葉と次の a=kemaha ukorupus とは、直接はつながっていない。5行下の oro ta を咲き取りして言ってしまったものと思われる。



orowa tane a=kemaha a=eas wa,  
 ney pakno ne yakka apkas easkay  
 a=ki ruwe ne kusu <su>,  
 “a=yupihi a=koyayattasa<sup>60</sup> rusuy kusu,  
 hosipi=an rusuy ruwe ne kusu,  
 onne utar pirkano yayepunkine.  
 ney pakno siknu yakne pirka ruwe ne na.”  
 sekor itak=an kor,  
 orowano, orowa soyne=an w\_a  
 a=kotanu kopakkehe a=eoma wa ek=an.  
 rewsu=an ranke ... rewsu=an kor  
 a=e aep ka a=i=korpare wa a=se wa,  
 rewsu=an kor a=e kor rewsu=an kor  
 hosipi=an ayne,  
 a=kotanu ta hosipi=an w\_a  
 inkar=an akusu <su>,  
 a=unihi ne a p soykehe  
 mun ka a=rise ruwe ka isam.  
 pan supuyapo<sup>61</sup> at kor siran w\_a,  
 oro ta hosipi=an w\_a ek=an w\_a  
 ahun=an w\_a inkar=an akusu,  
 a=unuhu ne yakka a=macihi ne yakka  
 pone takupi oka wa okay hine <ne>,  
 hompok apekes eukao wa kusu,

そこで、もう自分の足で立って  
 どこまででも歩けるように  
 なったので、  
 「兄に仕返しするために  
 家に戻りたいので  
 ご老人たちよ御自愛くださって  
 いつまでも長生きしてください」  
 と言うと、  
 私は外に出て  
 我が村を目指して戻った。  
 野宿を重ね…野宿しながら  
 食べ物も（老夫妻から）もらって背負ってきて  
 野宿してはそれを食べながら泊りがけで  
 家路をたどり、とうとう  
 自分の村にたどりついて  
 見ると  
 我が家であったところの表は  
 草むしりをした様子もなく、  
 細い煙が立ち上っていた。  
 そんな様子のところに戻ってきて  
 家に入ってみると  
 母も妻も  
 （やせ細って）骨ばかりになっていて  
 燃えさしが何本か積み重なっていたので

<sup>60</sup> koyayattasa : yayattasa は「お返しをする」ということで、礼をする場合にも、本文のように復讐をする場合にも用いられる。

<sup>61</sup> pan supuyapo : pan 「薄い」 supuya 「煙」 -po (指小辞)。人が生きている限り、囲炉裏の火は絶やさない。その煙がわずかに上がっているのである。

supuya at kor siran ruwe ne anan.  
 oro ta ahun=an w\_a orano,  
 "tane anakne siknu wa  
 hosipi=an ruwe ne na.  
 hopunpa yan."  
 sekor itak=an hike ka  
 "kunne hene tokap hene  
 usa wen kamuy  
 ene iramsitnere hi ne ruwe ne."  
 sekor haweoka kor,  
 ukosimuyamuya ayne  
 a=nikanika a=suyesuye<sup>62</sup> <e>.  
 uturuhu ta hawkeno hawkeno  
 seturuhu a=kikkik pa kor  
 a=suyesuye ayne <ne>,  
 tusa puy kari i=nukar<sup>63</sup> anan  
 i=nukarpa anan hine <ne> hopunpa hine,  
 "a=poho."  
 sekor a=unuhu hawean kor i=esikari.  
 "a=kor nispa."

煙があがっていたのであった。  
 家に入るとそのような有様なので  
 「今、生きて  
 戻ってきたよ。  
 起きておくれ」  
 と言ったのだが  
 「夜も昼も  
 魔物どもが  
 うるさいことよ」  
 と、ふたりとも言って  
 いやいやをしているので  
 体を揺すって揺さぶって  
 その合間に軽く軽く  
 背中を叩いて  
 揺さぶり続けているうちに  
 袖口から私を見て  
 私を見て起き上がって、  
 「息子よ」  
 と言いながら、母は私に抱きついた。  
 「あなた」

<sup>62</sup> a=nikanika a=suyesuye : nikanika も suyesuye も「揺する」ことだが、nikanika のほうはおもにこのように相手を揺り起こすために体をつかんで揺さぶるような場合に使い、suyesuye は木の実を振り落とすようなもっと強く揺する場合にも使われるようである。

<sup>63</sup> tusa puy kari i=nukar : 着物を頭からかぶって寝ているのだが、魔物は袖口からは入って来られないので、そこから表を覗く。萩中美枝氏は、かつて女性たちが何かにびっくりしたときには、とっさに顔を懐に入れて、袖口から覗く動作をすることをよく見かけたと述べている（個人的談話による）。また、萱野茂氏は夫を亡くした婦人が喪に服す間、外出するときは着物を裏返しにして頭からかぶり、みやつぐち（袖の付け根の開いている部分）から前を見て歩いていたのを見たと述べている（萱野茂 1975『おれの二風谷』すずさわ書店：65-66）。

sekor a=macihi hawean kor i=esikari.  
 orano i=ka ta cis rok cis rok ruwe ne hine  
 orowa inkar=an h\_ike,  
 a=unihi o p sintoko ne yakka  
 suwop ne yakka patci ne yakka <ka>  
 pirka p patek o p ne a p ...  
 nerok pe oar isam ruwe ne wa kusu,  
 "neun ne ruwe ne ya?"  
 sekor itak=an awa  
 "e=yupihhi hosipi wa ek wa orowa,  
 'niwen kamuy<sup>64</sup> ne wa <wa>,  
 cisekoas akusu  
 cise or wa a=sikoetaye wa isam  
 ruwe ne yakun,  
 niwen kamuy or wa a=e wa isam  
 ruwe ne kuni a=ramu kor  
 hosipi=an ruwe ne <ne> kusu,  
 macihi anakne ponmat ne anak ...  
 an yak pirka.'  
 sekor hawean kor ek kor a=kopasirota <ta>.  
 imatne<sup>65</sup> menoko simuyamuya kor pasirota kor,

と言いながら、妻も私に抱きついた。  
 そして私にしがみついて泣きに泣いた。  
 それから見まわすと  
 家の中にあったものが、行器も  
 箱も、鉢も  
 いいものばかりあったのだが  
 それらがすっかりなくなっているので  
 「どうしたことだ？」  
 と言うと  
 「お前の兄が戻ってきたときに  
 『悪い熊で  
 (弟が) 穴をふさいで獲ろうとしたところ  
 巣穴の中から引きずり込まれてしまった  
 そうなったのであれば  
 悪い熊に食べられてしまった  
 に違いないと思って  
 戻ってきたのだから  
 (弟の) 妻は俺の妾に…  
 なればよい』  
 と言って来たので、私は怒鳴りつけたのだ。  
 嫁も身もだえしてなじると

<sup>64</sup> niwen kamuy : niwen は「乱暴だ、猛々しい」。火事や水死者が出たときなどに行う、niwen apkas  
 とか niwen horippa とか呼ばれる儀礼では、カムイへの抗議のために力強く足踏みをしたり、雄叫び  
 を上げたりすることを niwen と表現しているのだろう。ただし、語源的には ni「歯」wen「悪い」  
 ということで、歯を剥きだしていがむことを指すのだろうと思われる。

<sup>65</sup> imatne : i-「その」mat「妻」ne「である」。「嫁」は kosmat, -i。ここは母親のせりふの中だが、  
 地の文のような言い方をしているので、a=kosmaci「うちの嫁」という代わりに、imatne menoko「妻  
 である女」という表現になっているのかもしれない。

こんど 'ruska ruwe ne'  
 sekor hawean kor  
 a=unihi o sintoko hene patci hene <ne>,  
 opitta rura wa okere ruwe ne korka <ka>,  
 emus sinep ... emus sinep op sinep  
 a=ehotke hi corpoke a=omare wa  
 kasi a=ehotke<sup>66</sup> kusukeraypo,  
 patek an ruwe ne."  
 sekor hawean kor sanke.  
 orowano suke=an w\_a  
 pan usey<sup>67</sup> paroho a=ottepa.  
 a=macihi ne yakka a=unuhu ne yakka  
 panuseykar=an wa,  
 hoski paro a=otte ayne <ne>,  
 hepestarara a wa kusu,  
 こんど num kor aep a=kar wa  
 num kor aep a=suwe<sup>68</sup> wa,  
 paroho a=o ayne  
 teeta montum teeta sirka a=ekarkar hine,

こんどは、『頭に来た』  
 と言って  
 家にある行器も鉢も  
 みんな持って行ってしまったけれど  
 太刀一本…太刀一本、槍一本  
 私の寝床の下に入れてあり  
 その上に寝ていたおかげで  
 それだけ残っているのだ』  
 と言って、(太刀と槍を) 出した。  
 そこで、私は食事の支度をして  
 薄いおかゆを口に入れてやった。  
 妻にも母にも  
 薄いおかゆを作って  
 まず(そのおかゆを) 口に入れてやると  
 頭をあげられるようになったので  
 今度は実の入った食事を作って  
 実の入ったお汁を作って  
 口に入れてやっているうちに  
 元通りの力、元通りの容貌を取り戻した。

<sup>66</sup> emus sinep op sinep ... kasi a=ehotke : 常套的な表現として、このような肉親への復讐の場面でよく出てくる。寝床の下に入れていたというのは、もちろん刀身と穂先の部分だけであり、柄の部分は後から自分で作るのである。

<sup>67</sup> pan usey : 直訳すれば「薄いお湯」だが、ここで usey と表現しているのは sayo のことであろう。長いこと食事をしていない人間にいきなり固形物を食べさせるとショック死することがあるので、薄いお湯のようなおかゆを作って与えるのである。

<sup>68</sup> num kor aep a=suwe : 直訳すれば「実のある食べ物を煮て」だが、アイヌの伝統的な基本食は魚や肉を中心に山菜類を入れた鍋物 (ohaw) であるので、aep 「食べ物」と言っても、ここでは ohaw という意味で訳してかまわない。

orowa a=unuhu kasi ta hotke emus op  
 sanke wa i=sam omare wa kusu <su>,  
 ne wa an pe op a=etete,  
 emus a=sitomusi wa op a=etete hine,  
 a=yupihi a=koyayattasa kusu  
 arpa=an ruwe ne hine,  
 a=yupihi oro ta apaotki ...  
 apaotki noski a=tuytektek<sup>69</sup>  
 awosma=an akusu <su>,  
 a=yupihi eronne no an w\_a,  
 yayrekkisar kikikiki<sup>70</sup> kor an.  
 macihi eutunne no an w\_a,  
 otu ka sinkop rankeranke  
 ore ka sinkop rankeranke<sup>71</sup> <ke>.  
 kaeka kor an ruwe ne hine  
 oro ta awosma=an hine,  
 a=wenyupihi mokkewkasi a=sirkootke<sup>72</sup>.

そこで、母がその上に寝ていた太刀と槍を  
 出して私のそばに置いたので  
 その槍を杖にして  
 太刀を佩いて槍を杖にして  
 兄に仕返しをするために  
 でかけて行って  
 兄の家の入口の<sup>むしろ</sup>筵...  
 入口の筵の真ん中をばっさりと切り落とし  
 中に飛び込むと、  
 兄は上座のほうを向いて  
 自分のもみあげをぼりぼりと搔いていた。  
 妻は下座のほうを向いて  
 ふたつの縊り糸のわさを下ろし下ろし  
 みつつの縊り糸のわさを下ろし下ろし  
 糸縊りをしていた。  
 そこに私は飛び込んで  
 悪い兄の鎖骨の間を突き刺した。

<sup>69</sup> apaotki noski a=tuytektek : 普通に家に入るときは戸口の筵の下のほうをそっと開けて、身をかか  
 めて入るのが作法である。それをばっさりと切り落として入るといのは、既に相手を殺そうとい  
 う意思の現れを表現している。

<sup>70</sup> yayrekkisar kikikiki : 沙流方言辞典には rekkisara kikikiki という表現について、「もみあげをかき  
 かきする (男の人が答える言葉を考えているときの仕草で、耳の前のあたりを人差指でかくように  
 する)」と述べている。ここでは、そういった解釈はあてはまらないようだが、何らかの意味のあ  
 る行為を表しているはずである。残念ながらその意味を十分に確認できていない。

<sup>71</sup> otu ka sinkop rankeranke ore ka sinkop rankeranke : kaeka 「糸縊り」を描写する際の、よく知られた  
 常套句である。

<sup>72</sup> mokkewkasi a=sirkootke : 1993年9月28日にこの表現について聞きなおした際、白沢氏は  
 mokkewehe a=sirkootke と言い直した。さらに意味について尋ねたところ、今度は a=emotcattuye  
 a=sirkootke という表現について、首筋の鎖骨の間の骨のないところを、後ろの骨の下に刃が行くよ

“nep ene tun ……  
 tun a=ne wa oka=an ruwe ne yakun  
 sekor yaynu=an w\_a an=an ruwe ne awa,  
 ene an kewtum ene an wen sampe  
 i=kokor\_ ruwe ne kusu,  
 a=yupihi ne yakka <ka>  
 a=siknure eaykap ruwe ne kusu  
 a=rayke siri ne na.  
 eramuan.”  
 sekor itak=an kor  
 penrekuci<sup>73</sup> \*a=eturs … a=etursere.  
 a=kor unarpe eutunne  
 “oyoyopo<sup>74</sup> oyoyopo.”  
 sekor hawean kor reyereye.  
 a=emotcattuye a=sirkootke<sup>75</sup>.  
 penrekuci a=etursere.  
 orowa a=macihi ne yakka  
 a=unuhu ne yakka arki hine,  
 “ine a=kor pe eci=eramuokay nankor\_ na.

「なぜ、あのように…  
 兄弟ふたりで暮らしてきたのであれば（まさか  
 そんなことはないだろう）  
 と思っていたのに、  
 あのような気持ち、あのような悪い心を  
 私に対して抱いたのだから  
 兄といえど  
 生かしてはおけないから  
 今、命をいただくぞ。  
 わかったな」  
 と言いながら  
 首を切り落とした。  
 我がおぼは  
 「オヨヨポ、オヨヨポ」  
 と言いながら這いずっていた。  
 私はその鎖骨の間を激しく突き刺し  
 首を切り落とした。  
 その後で、妻も  
 母もやってきたので  
 「どれがうちのものかわかるだろうから、

うにして刺すことだと説明した。mokkewkasi～と言うのと同じ意味かと再度問うと、「まあ同じに  
 しなさい」ということで終わってしまい、その後再び確かめる機会がないままになってしまった。

<sup>73</sup> penrekuci : 沙流方言辞典では penrekut の項で「(鹿の、あるいは動物一般の?)首の前側(人間で言  
 えばのどに相当する部分)」と説明し、penrekuci の項では「[動物](熊の)首(頭)。penrekuci a=etursere  
 そうして熊の首を切り落とした(この場合「頭」をさしている)」と説明している。ここでは、間違  
 いなく首から上の部分(頭)を指している。

<sup>74</sup> oyoyopo : 恐ろしい時に出る言葉。ayapo oyoyo とも言う。

<sup>75</sup> a=emotcattuye a=sirkootke : 註 72 参照。なお、別の話(N8710302.UP)では、a=emotcatotke a=sirkotuye  
 のように、tuye「切る」と otke「突く」が逆になっている。

sapte yan. rura yan.”  
 sekor itak=an akusu,  
 usa suwop usa sintoko  
 usa patci ne yakka opitta  
 macikor<sup>76</sup> hene,  
 “tan hike a=kor pe  
 tan hike a=eramuskari p.”  
 sekor a=unuhu hawean,  
 a=macihi haweoka kor,  
 esoyne <ne> sapte rok sapte rok wa,  
 okake ta inkar=an akusu,  
 canan nispa horari ruwe pakno horari<sup>77</sup>,  
 a=yupihi ne anan hine <ne>,  
 orowa iruska yuppa a=ki p ne kusu <su>,  
 a=ronnu wa orowa kor canan kor pe turano  
 cise a=nuyeoatke hine,  
 cise uhuy hum kohumumatki ki hine  
 cise raptak kuni kotpoki ta soyoterke=an wa,  
 orowa a=uni ta  
 a=kor sintoko hene suwop hene ne yakka  
 “a=kor hike tanike.” って  
 a=unuhu hawean kor sapte p ne kusu  
 a=rura hine <ne>,  
 nispa ...\*nis ... nispa ...

外に出しなさい。運びなさい」  
 と言うと  
 箱だの行器だの  
 鉢だのをみんな  
 女の宝物も  
 「これは私のもの、  
 これは知らないもの」  
 と、母が言い  
 妻が言いながら  
 外にどんどん出して  
 その後を見ると  
 たいしたことのない人物の住まいでしか、  
 兄の家はなかった  
 そこで、大いに腹を立てていたので  
 (兄と兄嫁を) 殺して、粗末な財産とともに  
 家に火をつけて  
 家の燃える音がごうごうと響き  
 家が崩れ落ちる寸前に外に飛び出して  
 それから我が家に  
 うちの行器も、箱も  
 「これはうちのだ」って  
 母が言って外に出してあったので  
 運んでみると  
 長者…

<sup>76</sup> macikor : mat 「女」 ikor 「宝物」。tamasay 「首飾り」や ninkari 「耳飾り」など、女性の装身具を指す。

<sup>77</sup> canan nispa horari ruwe pakno horari : 直訳すれば、「たいしたことのない長者が暮らすこと程度の暮らし」

sonno nispa horari ruwe pakno	本当の長者の暮らしぶりほどの
horari kur a=ne anan <sup>78</sup> w_a,	暮らしをしているもので私はあった。
a=yupihi or wa a=i=keske	兄にねたまれた
katu ne anan ruwe ne korka,	ということであったのだが、
iruska yuppa p a=ne kusu <su>,	私はひどく腹を立てたので
a=wenyupihi a=toykotuye a=sirkotuye	悪い兄をずたずたに切って
a=rayke wa,	殺して
unihi turano a=nuyeotke wa,	家ごと火をつけて
unihi turano a=uhuyka wa isam ruwe ne <ne>.	家とともに燃やしてしまった。
orowano easir <sup>79</sup>	そういうことがあって、初めて
sonno katkemat sino katkemat	本当に立派な淑女を
a=kor pe ne kusu <su>,	妻にしていたものだから、
toyta ... toyta ...	畑仕事…
a=unuhu ka i=kasuy wa toyta wa,	母も私たちを手伝って畑仕事をし
poronno usa toyta aep ne yakka,	野菜もたくさん
pu epunpa kor oka=an.	収穫してくらしていた。
asinuma anak ekimne=an kor,	私の方は山へ行くと
tup sumawe rep sumawe a=eawnarura ...	何頭もの獲物を獲ってきて…
a=eawnarura p ne kusu,	獲ってきたので
cise or_ ta ikasma kam	家の中で余った肉を
soy ta cise okari racitke.	外で、家の周りに（干し竿に）下げて
cep ne yakka poronno racitke <sup>80</sup> .	魚もたくさん下げて

<sup>78</sup> horari kur a=ne anan : anan が使われているので、自分のものを取り返してを家に運び込んでみたら、自分は大層な長者だったのだなあと、あらためて気づいたという表現。

<sup>79</sup> easir : easir は「何かがすんでからやっとなをしたら」ということで「～をして、初めて～した」と訳されることの多い副詞だが、ここでどういうことを言おうとしたのかは、いささか明確でない。素直に読むと、「そういう事件があった後でやっとな妻をむかえることになった」ということになりそうだが、それではつじつまがあわなくなる。



pirka ...	素敵な…
pirka uhekote kamuy uhekote a=ki kor,	素敵な夫婦生活、理想的な夫婦生活を送りつつ
a=macihi okkayo po ka menoko po ka	妻は男の子も女の子も
poronno kor hine,	たくさん産み
orowano menoko ne hike	そして、女には
menoko monrayke macihi epakasnu.	女の仕事を妻が教え、
okkayo ne hike okkayo monrayke	男には男の仕事を
a=epakasnu kor oka=an ayne,	私が教えて暮らしているうち
tane anakne a=poutari rupne.	もはや息子たちも大きくなった。
a=kor matkaci utar ne yakka rupne wa <wa>,	女の子たちも大きくなって
payeka kur <sup>81</sup> a=kotanuhu ta	旅人が私の村で
a=unihi okari cisekar wa <wa>,	私の家の周りに家を建てて
kotankorkur_ ne a=i=kar wa	私を村長として
pirka i=hekote, kamuy i=hekote	私を立派に遇してくれて
a=ki kor oka=an.	暮らしていた。
a=poutari rupne p ne kusu,	子供たちも大きくなったので
ekimne wa ekimne=an epirka hi koraci ikipa wa,	山に行って、私が山で獲物を獲ったようにして
tup sumawe eawnarura rep sumawe eawnarura.	たくさんの獲物を獲ってくる。
nep a=e rusuy ka nep a=kor_ rusuy ka	何を食べたいとも何を欲しいとも
somo ki no okay=an ruwe ne korka,	思わずに暮らしていたが、
sukup hontom ta naanipakpe	人生の半ばで、もう少しのところで
a=weyyupihi i=sirko ...	悪い兄にひどい…

<sup>80</sup> cise or\_ ta ikasma kam ... : 同じような状況を別の話では次のように描写している。a=unihi cise onnay kirpu racitke kam racitke p ne korka <ka>, cise or\_ ta ikasma hike soy ta kumakar=an w\_a kuma or a=esikte p ne kusu 「家の中に脂身や肉を下げたのだが、家の中で干しきれない分は、外に干し竿を立てて、干し竿をいっぱいにして」(N8710301.KY)

<sup>81</sup> payeka kur : 故郷を離れて歩き回っている人がたまたま訪れて、そのまま村にいついてしまうことによって村が大きくなるという描写は、ウエペケレのエンディングによく見られる。

i=sirkorayke ruwe ne korka,  
pon\_ seta kamuy i=ka opas wa  
i=ouri wa upas tum w\_a  
i=sanke kuskeraypo,  
siknu=an w\_a  
po ka kor matkaci ka hekaci ka  
poronno kor kur a=ne ruwe ne kusu,  
neun pakno  
irwak ne yakka <ka>,  
irwak kewtum neun an y\_a sekor an pe,  
pirkano uwanpare kor sukup kus ne na.  
sekor kane <ne>,  
sino nispa sonno nispa  
hawean kor onne ruwe ne.  
kusu a=ye na.

ひどい殺され方をしそうになったのだが  
小犬のカムイが助けに来て  
私を掘って、雪の中から  
私を出してくれたおかげで  
私は生き延びて  
子供ももうけ、女の子も男の子も  
たくさんできたので  
いつまでも  
兄弟だといっても  
兄弟の心がどうなっているのかということ  
よく見定めて暮らすのだぞ  
ということ  
本当の長者、立派な長者が  
言いながら天寿をまっとうした。  
というお話だ。

(なかがわ ひろし・千葉大学文学部)